
癒し屋

夏野 狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

癒し屋

【Nコード】

N1056S

【作者名】

夏野 狗

【あらすじ】

少年と少女のコメディー系のお話。

俺はただの学生で、ちよつとした非日常を望む、どこにでもいるようなありふれた高校生だ。

急に異世界に行ったり、邪気眼が発生したり、妖精や霊が見えたりとかそんなことも一切無いただ学生。

「ふんふんふんふん」

そんな学生の前に、急に変なちびっ子が現れたりしたらそれ自体がもう——非日常である。

癒し屋

「ふんふんふんふん」

鼻歌を歌いながら、向こうから……カバに乗ってやって来る少女が俺の目には映った。

しかも、少女の格好がただの格好ではない。なんと魔女っ子風である。

おお、これこそ俺の望んでいた非日常。
ってそんなわけあるか！

なんでこんな田舎に魔女っ子？ てか、カバ！？ 体長こそメートルほどしかなさそうだが、紛れもなくカバである。

「ふんふー……おや？ もしかして橘さんですか？」

しかも俺に用事！？

「え、あ、そうですけど」

思わず敬語な自分。

なんでこの子、俺の名前を……。

「こんなに早く発見できるとは思いませんでした。町内を四周した

甲斐がありました」

いや、それ全然早くないからね？ 町内四周って何時間歩き周ってたんだよ……。

「初めまして。この度あなた——橘一様を癒しに来たルカです。あ、ちなみに漢字では、流れるに難しいほうの華と書いて流華です」

そんなん知るか。

癒し……？

俺はこの魔女っ子をスルーするべきなのだろうか。

自分は何も見えていない、聞いていない。そんな風に大人しく家へ帰るべきなのだろうか。

なんか関わっちゃいけない気もする。なにこの痛い格好。それ以前にこのカバどこから連れてきた。

「いや、ルカちゃん……？ うん、まず、癒しとか以前に『ソレ』なに？」

「ソレってなんですか？」

「いや、それ。君が乗ってるソレ」

少女が跨っているカバを指差す。

「ああ、ヒポポタマスです」

「……え？ カバじゃないの？」

「カバじゃありません。ヒ・ポ・ポ・タ・マ・スです」

いや、分かるけどさ。

いや、分かんないけどさ。

確かにヒポポタマスで合っている。ヒポポタマスとは、カバの英語名だから合ってはいる。

しかしなぜわざわざ英語にした！？

てか俺今なんかこの子に馬鹿にされた気がする。カバだけに。

いや、全然上手くないけど。

「……うん、そのヒポポタマス（カバ）はどこから連れてきたの？」
「マイペットです」

胸を反らして偉そうに言う少女。

べつになんも偉くないぞ。

「そうか、マイペットか。不躰なことを聞いてすまなかったな。じゃ、俺はこれで」

なんだかすごく嫌な予感がした。これはさっさと立ち去るべきだと自分は判断した。

それだけ言うと、俺は力……いや、ヒポポタマスに乗った少女の横を通り過ぎ——れなかった。

学生服の裾を掴まれた。

「なんだこの手は？　俺は帰るのですが」
「ダメです」

俺に背を向けた格好のまま、彼女はきっぱりそう言い放った。

「は？」

「ダメです。言ったでしょう？　私はあなたを癒しにきたんです」
裾を離し、こちらを向いて笑顔で言われた。

「いや、そんなこと言われても俺これから帰るから……」
「分かりました。ではまた明日お会い致しましょう。そしたら、あなたのことを癒させてくださいね」

少女はそう言うと、俺の帰る道とは反対側へヒポポタマス（カバ）に乗って去って行った。

助かった……？　面倒事自らいなくなってくれるとは。

安堵し、再び帰路へと着く。その道中、当然ながらヒポポタマス（カバ）に乗った少女には出会わなかった。

自分で望んでいたちよつとした非日常はあっさりと終わり、また日常に戻るのだと俺は思った。

少女は『また明日』と言っていたけれど、なぜだか俺は、明日になっても少女は現れないのだと思った。

家に着き、夕食を食べ、お風呂へ入り寝る。

ちよつとした非日常など、こんなものなのだ。

——明日になっても、少女が現れることはない。

明日になれば、自分はおかしな夢を見ていたのだと思うに違いな

い。

翌朝、学校へと行く為、朝から家を出た。

朝と言っても、学生には当たり前の時間である。

というか、もう九時である。普通の学生は登校とつくに登校している時間である。

まだ暖かい季節とはいえ、やはり朝(?)は空気が少し冷たい。そんな冷えた朝の空気を肺に吸い込みながら、前を見ると少女がいた。

まるでそうあることが当たり前かのように、俺の通る道の前方にいたのだ。

少女——いや、魔女っ子風少女が俺の行く手を塞ぐように、前方に立っていた。

ここで俺は思う。

——ああ、夢じゃなかったのか。

いや、それともこれ自体も夢なのだろうか？ 十分にありえる。

俺は低血圧で朝は苦手だからきつとそうだ。うん。まだ頭が起きていないのだろう。

きつと幻覚だ。

俺は、少女の横を何も見ていないと言うように通り過ぎ——れなかった。

少女が俺の学生服の裾をがっちり掴んだ。

なんだこのデジャヴ。

「はあ……」

一つ溜め息を吐く。

すると、少女からぐすつという、まるで泣いているかのような…

…え？

「え!？」

少女のほうを見ると、確かに泣いていた。

……俺のせい、か？

困った。いや、今更ご近所さんの目がどうのここのというわけではなく、俺は子供が苦手なのだ。

泣かれるとひどく困る。

「悪い。俺がなんかしたか？ すまん」

しゃがんで、少女の目線になって、少女のほうを向いて謝る。

「ぐすつ……。違うんです……。私の、カ……。ヒポポタマスがどこかに……。ぐすんつ……。行っちゃったんですう……。」

おまえ今さり気にかバって言いそうになっただろ？

こんなときにあれだけど完全に言いかけただろ？

「そつか。まあ、頑張っただけ」

「ひどいです！ 橘様も一緒に探してくださいよっ！」

「なんで俺が……」

誰がそんな面倒なことをやらなければならないのだ。

もう九時もまわっているけれど、俺はこれから学校だ。

「ひっく……。分かりました。無茶なことと言ってすみませんでした」

少女は服の裾を離し、小さく頭を下げ走り去っていった。

まったくもつての謎である。

『また明日』って、俺にヒポポタマス（カバ）を探してもらっためにまた明日って言ったのか？

「ま、いいや。学校いかねえと」

完全に遅刻もいいところだが、行かないと留年にされてしまう。

なんとなく、少女が走っていった道を通りたくなくて、遠回りをした。その場を去るとき、なぜか後ろを振り返ってる自分がいた。

少女は嘘泣きをしているようには思えなかった。本当にヒポポタマス（カバ）がどこかへ行ってしまう、心配しているのだろうと予想した。

けれど、それだけの話である。自分にはなんの関係もない。

昨日初めて会った少女で、しかも魔女っ子風。しかも、ヒポポタマス（カバ）に乗ってるし。急に意味不明なことを言い出したかと

思えばあっさりどこかへ行き、今日になっていきなり一緒にヒポポタマス（カバ）を探してほしいだなんてそんなこと。

自分にはまったくもって関係ない――。

気付くと、自分は少女が走り去って行った道を走っていた。

子供は嫌いだ。

すぐに泣くから。泣いてもどうにもならないのに。

何も、戻らないのに――。

「くそっ……！」

むかつく。

なんで俺は今必死になっているんだ。

あんな昨日今日会ったばかりの変な子供のために。

しばらく走ると、少女の後姿が見えた。

さすがに子供の足だけあって、そんな遠くには行っていないかった。

「おいっ」

声をかけると、少女の肩がびくつと震えた。

「な……あ、橘様……。どうされたんですか？」

「どうされたんですかじゃねえよ。ヒポポタマス（カバ）、どこか行きそうな場所とかないのかよ」

何気に、久しぶりに頑張つて走ったからはあはあ言いながらの、なんとも格好つかない俺の台詞であった。

「え……？　一緒に、探してくださいさるんですか？」

少女の目がぱつと輝き、なんとも嬉しそうな顔をする。

「ああ。探してやるから、行きそうな場所一緒に探すぞ」

「はいっ、橘様っ」

まだ見つかったでもないのに、これだけのことで嬉しそうにしている。

子供はなんとも単純だ。

「いせんねえ……、ヒポポタマス（カバ）……」

「てかヒポポタマス（カバ）が勝手にどっか行くのかよ普通……」
とりあえず、町内をしらみつぶしに探す。

「ちよつと目を離してたらどこかへ……」

「どこかへ……じゃねえよ！ ペットの管理くらいちゃんとしとけ
！」

「うう……。おい、ヒポポタマスやい。ほら、橘様も一緒に」
ふざけんな。

そんなんで出てきたら苦労しねえ。

むしろそんなんで出てきたら驚きだわ。

「てか、その『橘様』ってのやめてくれ」

「え、なんでですか？ 橘様は橘様じゃないですか」

外でそんな風に呼ぶから、さっきからおまえが『橘様』言う度に
道行く人が変な目で見えるんですけど。

まるで俺がそう呼ばせてるみたいに変な目で見られるからやめて
ください、お願いします。

まあ、こいつが魔女っ子風の姿をしているせいもかなりあるのだ
ろうけど。

「俺は俺だけど、様はやめてくれ。橘でも一でもどつちでもいいか
ら、好きなほうで呼んでくれ」

「いえっ、そういうわけにはいきません。一応『ご主人様』ですか
ら！」

大声でそういうことを言うなああああああああああああ！
！！！！！！

見る！ たちまち変な目を俺に向け、ひそひそとおばさんたちが
会話したじゃねえか！！」

「ちよつと黙れおまえ。いえ、黙ってください、お願いします」

「私はあくまで、主従関係を言っただけじゃないですか」
ちよつとご立腹である。

お嬢ちゃん、ちよつと黙ろうか。主従関係とかどうでもいいから

黙ろうか。

「いえ、もう分かったのでどうぞそのお口を閉じてくださいませ、ル力様」

「急になんなんですかー」

あれ？ 俺たちヒポポタマス（カバ）探してるんだよね？

なんかちよっとおかしいな方向に向かつてる気がするからさっさとヒポポタマスでもカバでもなんでも見つけて、学校へ行こう。

「しかしほんとにいないなあ……。もう町内はほとんど見たぞ。ひよつとして町の外出てるのかもな」

「そうなんですかねえ……。さすがに町の外に行っちゃうと見つかりにくいですね……。」

しょんぼりとする少女。

いや、ヒポポタマス（カバ）とかどこに居ても目立つからね？

一メートルしかないって言ったってさすがに目立つからね？

しかしそうだよなあ……。ヒポポタマス（カバ）とかそんな目立つ動物すぐ見つかりそうなものなんだが……。

時刻はすでにお昼の十二時近い。

なんだかんだ言いつつ、結構探し回っている。

「まあいろいろ言ってもしょうがねえしもう一回町内見てまわるか。それでいなかったら町の外探しに行くか」

「はいっ」

気のせいかな、少女が嬉しそうだ。

相棒（？）のヒポポタマス（カバ）がいないにも関わらず、結構元気そうだ。

「おまえなんだか心なしかな嬉しそうだな」

「ええ。だって、橘様が一緒に探してくださってるんですもの。最初はまったく協力する気がなさそうだったのに。」

これが噂に聞くツンデレってやつですかね」
違う。断じて違う。

そのいい加減な情報をおまえはどこから仕入れてきたんだ。

「ちよつとインターネットで」

「現代っ子だなオイ！」

「というか勝手に人の心を読むな。」

「ふふ……！」

「まさかおまえ本当に俺の心が……！？」

などと、ツンデレではないが、数時間の間に俺たちはすっかり仲良くなっていたらしい。

見た目はかなり変だが、話してみると面白い子供だ。

「みつからねえ……」

時刻はもう夕方の四時になる。

あれから、昼食のマクドナルドをはさんで、ヒポポタマス（カバ）の搜索を続けていたが、一向に見つからない。

ちなみに、マックは俺一人が店に入って買ってきた。

既に、こいつの魔女っ子風の姿町の人の目には散々晒されたが、さすがにそこは俺も人間である。

マックの店内に入れる気にはならず、魔女っ子を一人外で待たせて買ってきた。

その間にも、町の人の目には触れていただろうが店内に入っていないければ俺的にはセーフ。

「見つかりませんねえ……」

『ふう』という二つの溜め息が漏れる。

「いったん自宅に戻ってみますか」

そう提案する魔女っ子少女。

「自宅っておまえ家あるのか」

まあ、当然はあるだろうけど。

ヒポポタマス（カバ）が住める家ってどんなんだ？

「ありますよー。ちよつと歩いたところにあるのでいったん戻ってみますね」

「おお」

とくに探すあてもないので、その提案には賛成した。

正直、すでに何時間も歩きっぱなしなので、家で少し休憩したい。

「ここです」

しばらく歩くと、彼女の家らしいところへ着いた。

「は？」

「は？ ではありません。ここが私たちの家です」

「いや、家っていうか……空き地じゃん」

おまえは漫画やなんかのありえない場所に住むホームレスキャラかつつ。

しかも、高さが一メートルはありそうな草がそのへんにやたらめつたら生えている。

完全に空き地じゃん。しかも何年か放置してるような。

「空き地じゃありません！ 真ん中あたりにちゃんと土管があるんですよ！？」

いや、そんなことで怒られても……。

土管って家にならないし……。

「分かった。おまえの家はもう見飽きたし、帰ろう」

見飽きたと言うか、見る場所すらない。

自分の家に帰って少し休憩しよう。こんなところで休憩もなにもあつたもんじゃない。

空き地に背を向け、さつさと歩き去ろうとしたとき、空き地からがさがさと草が揺れる大きな音が聞こえた。

「なっ、今の音なんだ」

不自然に響く、草が揺れる大きな音。

まるで巨大生物が潜んでいるような……——え？

『巨大生物が潜んでいるような』……？

俺はその音がしたほうへ、草を掻き分けて進んでいった。

あわてて走り出すものだから、後ろの魔女っ子が驚いているのが分かった。

やけにただっ広い草だらけの空き地の真ん中辺りまで行ったとき、『ソイツ』は見た。

「やっぱり……」

思わず、安堵なのかなんなのか分からない溜め息が漏れる。

俺はその位置から大声を張り上げた。

「おい、ルカー！　ちよつとこつち来いー！」

「え、なんでですかー！？」

向こうもまるで俺に負けないというふうに声を張り上げる。

「いいからちよつと来い！」

そう言つと、返事する声はなくなり、代わりに背後からがさがさという音が聞こえ始めた。

「あー、いたー！」

ヒポポタマス（カバ）を見るや否や、彼女は大きな声を出してヒポポタマス（カバ）に抱きついた。

「よかったあ……」

目にうつすらと涙が見える。

なんとも感動の再会である——と、そんなふうに俺が思うとでも？　そりゃ、ここがせめて百メートル離れた場所、もしくは町の外だったら良かったと思うことが心からきつとできたことだろう。

しかしここは、彼女の自宅（空き地）らしい。

つまり、こう推測するのが妥当であろう。

——ヒポポタマス（カバ）はこの空き地からは一步も出ていない。目覚めた少女はまず、ヒポポタマス（カバ）を探した。しかし、ヒポポタマス（カバ）は見つからなかった。

ヒポポタマス（カバ）は、空き地の隅のほうできつと寝ててもいいのだらう。

無駄に広いこの空き地全部を彼女が見て回ったとは思えない。

そう、つまり——俺たちがヒポポタマス（カバ）を探し回った時間は無駄だったのだ。

「よかったなあ、魔女っ子少女?」

「はいっ!　ありがとうございました橘様」

お互いにニコニコと笑っている。

しかし俺の笑顔は、怒りの笑顔である。

「おお。べつに礼には及ばない——とでも言うと思ったか?」

「え……?」

感激のあまりか、ずっとヒポポタマス(カバ)に抱きついて嬉しそうにしていた魔女っ子が、ヒポポタマス(カバ)から手を離し、真顔になった。

「ふ・ざ・け・ん・な・よ」

笑顔を貼り付けて、魔女っ子に言って見る。

怒っていることは、誰が見ても明白であろう。

「今日は平日だ。当然ながら、俺は学校がある。ちなみに自慢じゃないが、俺はあまり学校に行っていないので、あと何回か休んで単位を落とすと留年するんだよ。」

それなのにわざわざ、この敷地から一歩も出ていないであろうその生物を探す為に俺は何時間費やしたと思う?　探し始めたのは確か朝だったよなあ。今はどうだ?　夕方だよなあ?」

「ひえっ……!?!」

怯えた目になる少女。

はたから見ればさながらこの図は、今まさに狼に食べられようとしている子羊の図であろう。

べつに、今まさに蛇に食べられようとしている蛙の図でもなんでも構わない。

ようは、より強きモノが獲物を捕食しようとしている場面だ。

「さあて、どうしてやろうかなあ?　魔女っ子、おまえに最後を選ばせてやるよ。」

焼かれるのがいいか?　煮られるのがいいか?　それともべつのがいいか」

「ひえええ……っ」

「ふう……。なんて、冗談に決まってるだろ」

そう、さすがに冗談である。

これくらいのことですすがに殺人は犯したりしない。

まあ、これくらいと言っても授業を一日休むのは俺にとっては結構重要な問題なのだが。

「よ、よかったあ……」

その場に、ヒポポタマス（カバ）に寄りかかる形でへたりこむ少女。

「さすがに冗談だよ。ヒポポタマス（カバ）見つかってよかったな」

「あ、ありがとうございます……。本当に橘様のおかげです。ありがとうございます」

こう素直にお礼を言われてしまうと、これ以上何も言えない。

まあ、見つかってよかったとは本当に思っている。

そして、俺も俺でなかなか楽しい時間を過ごせた気もする。

それこそ『癒し』ではなかったものの、楽しかった。

「いいよ、もう。これからはちゃんと空き地全部探してから行方不明だ！ って言えよ？」

苦笑いする俺。

楽しいには楽しかったが、もう御免だ。

「はい、そうします」

ちよつと照れたふうに言う。

——まったく、とんだ一日だった。

家に帰り、夕食を食べ、眠る——はずだったのだが。

「なんでおまえがいるんだよ！？」

「えっ、だってまだ私橘様に癒しをあげていませんから」

「なに！？ なにその当然のような言い方！？ どうしたらそんな

ふうに生きれるのか教えてほしいなっ！　べつにもう癒しとかどうでもいいから帰ってくれない？　というかね、癒しどころか、君のせいでイライラしっ放しなんだけど、まずこれをどうにかしてくれない？」

「どうしたらいいですか、橘様」

「分からないの？　ねえ、本当に分からないの？」

「……橘様って意外に大胆なんですネ。いいですよ、私の体で癒せるのなら……」

「わー、わー！　おまえ何言ってるの！？　ちょっととりあえず、黙って！　お願い黙って！？」

「え、そんな……すぐにしたいと仰られるのですか……？」

「何この子！？　もう殴っていい！？　いいよね？　この子ならもう殴ってもいい気がする。」

勝手に俺を変態キャラにすんなっ！

「人の趣味はそれぞれですから、橘様がロリコンであることは私はとくに気に致しません」

「黙れ。分かった、黙れ。おまえが黙らないなら俺が黙らせる」

「そ、そんな！　きつ、キスはダメですっ！　私初めてのキスだけは好きな人と……っ！」

「いいよもう。おまえの脳内はどうなってるの？　どうしたらそういう変な誤変換ができるの？　ねえ？」

——と、まるでコント状態である。

いや、混沌^{カオス}状態である。

互いが互いに息つく暇もなく、こんな会話をしていた。

「はあ、もう……」

疲れた。

色んな意味で疲れた。

「落ち着かれましたか、橘様」

そつと優しく声をかけてくる魔女っ子。

なにその意味不明な優しさ。

「いやなにその自分は無関係ですみたいな顔？ 全部君のせいだからね？」

「え、橘様は私のせいでロリコンに……？」

「ちげーよ！ もういいわ、その流れ！」

いや、正直飽きてはいない。というか、楽しい。

「まったく……。急に人の家上がりこむかなあ、普通」
そうなのだ。

あのあと、魔女っ子（ヒポポタマス（カバ）付き）は俺について来た。

そして堂々と家へ上がったのだ。

「橘様が一人暮らしだったので、これはしめた！ と思いまして」

「なにがしめた！ なの！？ なにこの子！ 恐ろしい！」

なんでこんなに仲良くなっているのか不明である。

「いや、おまえはともかくとしてさ……なんでタマまで俺の家連れて来てるの？」

「え、タマ？ もしかしてヒポポタマス（カバ）のことですか。わー、可愛い。いいですね、タマ。」

きつとタマちゃんも気に入ると思います」

いや、もうこの話も終わるのに今更タマもなにもないんだろうけどさ。

ここまでにもう何回『ヒポポタマス（カバ）』使ったか分からないからね。

いい加減読者さんもイラッときてるだろうからね。

なんかタマとか言い出してる時点でまた読者さんがイラッとしてるだろうけどね。

なにタマとか猫みたいな名前付けてるんだよ！ ってたぶんご立腹なんだろうね。

もしくはなんでそんなに下ネタに走ってるんだよ！ って怒って

るかもしれませんがね

「てかちげえよ！ タマとかはどうでもいいんだよ！ な、ん、で、タマまで家に連れて来てるのか聞いてるんだよ！ カバとか俺の家じゃ飼えねえよ」

「カバじゃありません！ ヒポポタマスです！」

「分かった！ な、ん、で、ヒポポタマス（カバ）まで俺の家にいるの？」

「マイペットだからです」

だからなんで胸を反らす。

だからなんでそんな偉そうなんだよ。

「タマちゃんの世話は私がします」

「そういう問題じゃない。そもそもおまえが住むことを許可した覚えはない」

ぶーっと頬を膨らます魔女っ子。

「いいじゃないですかー。人の一人や、ヒポポタマス（カバ）の匹くらい」

「ヒポポタマス（カバ）が問題だ」

「……」

お？ 急に黙ったぞ。

観念したか。

「橘様ひどいです……。女の子をあんな空き地で一人寂しく寝かせるなんて……ぐすっ……」

なんで泣くうううううううううう！？

そもそも、男の一人暮らしの家に住むのも問題だろうが！？

「ふう……。分かった、分かったから泣くな」

「本当ですかっ！？」

ぱつと顔を上げ、笑顔になる魔女っ子少女。

おい、嘘泣きか頭の悪いお嬢ちゃん。

「嘘泣きじゃありません。本当に泣いてました。でも橘様の許可がもらえてよかったです」

にこつと微笑む少女。

うつ……。その顔はどうも弱い自分がいる。
しょうがないなあ……。

かくして（？）、俺の部屋には変な同居人が増えた。
俺の日常は、この日から非日常に変わったのであった――。

「ただし、タマは家の中には入れるなよ」

「はい」

「それと俺の言うことはちゃんと聞け」

「はい、ご主人様っ」

「その呼び方はやめろ」

「はい、橘様っ――！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1056s/>

癒し屋

2011年4月1日04時55分発行